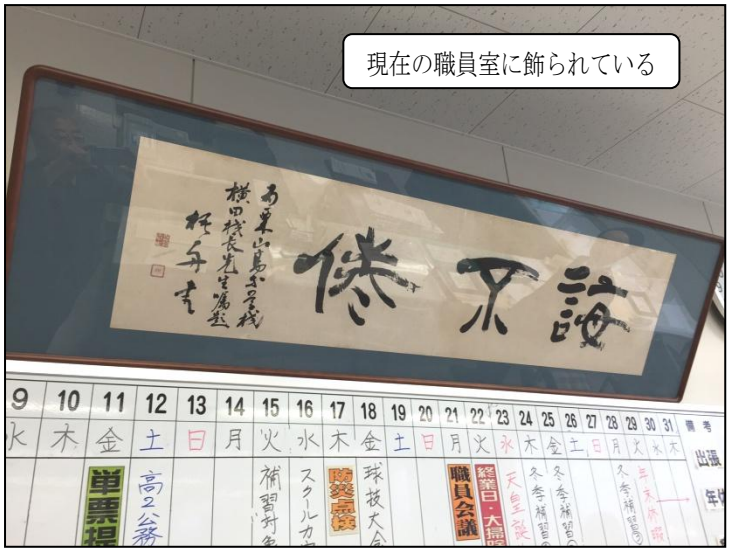
「誨不倦」



現在の職員室に飾られている

これは職員室にある扁額で、ここに飾られたいきさつがこの額の横のＡ４の紙に記載されている。記載した人物は調べてみると本校の書道の教員である渡部春幸先生であることが分かった。

校長室にある学校教育目標を書かれた先生であり、体育館にある校歌も渡部先生の揮毫によるもの。

以下にその文章をそのまま記載しました。当時の状況や思いが伝わってきます。

「誨不倦」の額について（渡部先生記）

その“額”と対面したのは、赴任早々の**作法室**（右下写真）であった。２０人以上の組合員が１０畳の和室に車座になり第一回班会議が行われていた。司会は書記長の松橋先生だった。会議のあまり好きではないわたしは屋外のサッカー部の練習をチラチラ見たり、正面の梁に掲げられた“額”をボーと眺めたりしていた。その額は古い表装で、何カ所か破損し、全体にハエの糞がちりばめられていた。「なんて読むのかな。」「どういう意味かな。」などと思いながら会議の早く終わることを願っていた。額の文字は隷書と篆書が混交した破体に近いもので、３文字の中に空気をつんざくような強烈な線が何本かはめ込まれているのが印象的だった。それは一種カジュアルな様相で不思議な雰囲気をもっていた。一体誰が揮毫したものか。エッ“ゴシュウ”金丸梧舟か。ならば札教の教授。何故ここに・・・。奥書きに「為　栗山高等学校　横田校長先生　嘱題」とある。“めぐみちゃん”の祖父。横田校長（昭和３２～３５本校在職）と梧舟との関係を知る由もないが、ひょっとしてある日突然梧舟を訪問し揮毫してもらったのではないか。準備万端のものと思えぬ。構えがない。卒意の書。

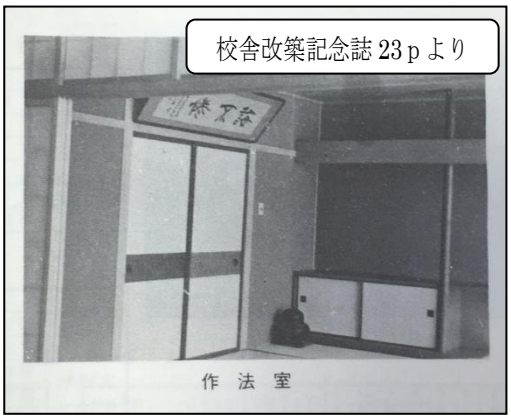
旧校舎移転時、西山校長からどれを残すと迫られ、この一点と申し上げた。しかし、そのままではぼろをまとわせているのと同じだ。あまりにみすぼらしくかわいそう。やはり、作品を洗い額装にしなければと申し上げたが、学校にそんな予算はないという。やむなく自費で表具し、準備室に掲げ半ば私物化していた。しかし、教育の原点を伝えようとしている論語の額を準備室に閉じ込めておくのはもったいない。どうかふさわしい居場所を探してやってください。

わたしにとって、この言葉はそばにおき毎日眺めていたにもかかわらず最後までかなわなかったのである。

＜原文　論語・述而第七＞
子曰、默而識之、學而不厭、**誨人不倦**。何有於我哉。

＜書き下し＞
子曰はく、黙してこれを識（しる）し、学びて厭（いと）はず、**人を誨（おし）へて倦（う）まず。**何か我に有らんや。

＜和訳＞
先生が言われた、「黙っていながらよく認識し、学問をしてあきることなく、**他人に教えて怠ることがない。**これらのことは私にとって何でもない。



校舎改築記念誌 23ｐより
作　法　室

【「**人を教えて倦まず**」とは、教育というものは、相手があっての事柄であり、相手はなかなかこちらの言うことを納得しないものであるけれども、そのために熱意を失わない。】大変、深い意味があります。

文責　北海道栗山高等学校長